

神奈川県立高等学校PTA連合大会

令和7年12月掲載

タイトルにある大会が、11月29日（土）、伊勢原市民文化会館にて開催されました。

大会において2つの表彰があり、事前に連絡はいただいていたが、本校にとって嬉しい出来事がありました。まず、神奈川県立高等学校安全振興会主催の「作文コンクール」で279作品中、最優秀賞の二名のうち、一名が3年4組・米山太一さんが選ばれこの場での朗読を披露したことです。朗読は立派に行われ中農生らしく“生きる＝食の安全・食育＝食という生きる力”がテーマとなっていました。（原稿は下部に掲載）

続いて高P連主催「広報紙表紙コンクール」では、広報委員会応募の右図の表紙が53作品のうち優秀賞に輝いたことです。昨年に引き続きの受賞で関係者の努力とセンスの賜だったと思います。おめでとうございます！

その他に希望ヶ丘高等学校PTAと市ヶ尾高等学校PTAのPTA活動事例発表をはさみ、最後に記念講演として東儀 秀樹氏による「すべてを否定しない生き方～何事も前向きに考える方法論～」と題しての講演がありました。雅楽師である氏の演奏を織り交ぜながら、楽しい講演を聞かせていただきました。やはり一流の演奏は聞きごたえがあり、素晴らしいものでした。



広報紙の表紙

令和7年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の向上を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が多数寄せられました。程島宏美委員長、平松和夫副委員長、海浦洋子委員、原口瑞委員、萩谷英明委員、立花ますみ委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会で、最優秀賞2編、優秀賞7編、佳作31編が決定されました。この中から最優秀賞に選考された作品を掲載します。

最優秀賞

「食という生きる力」

県立中央農業高等学校 三年

米山 太一

「食は物に根 人が生きる力であり安心して口にできるものでないとなめなんだ。」研修先の農家に言われた言葉は、今も、これからも私の心に残るものになった。

我が家は神奈川県西部小田原市の柏山という土地で、代々水稲の栽培を行っている。幼少期は、兼業で仕事をしながら情熱をもって米と向き合う祖父たちの姿を見て過ごした。しかし、私が小学校三年生のとき、両親が離婚。六年生のときに祖父が亡くなり、私は米と関わるのが一切なくなった。中学生になり、進路選択に悩んでいる私に、母は、亡くなった祖父の話をよくしてくれた。話を聞くうちに、今まであまり知らなかった祖父の家族への愛情や、米への想いを知り、少しずつ農業への関心が高まり、中央農業高校への進学を決めた。

入学後、将来は米農家になりたいと先生に伝えると、平塚市で起業し観光農業に取り組みガヤマファームの菊池さんを紹介していただいた。ガヤマファームでは、無農薬や減農薬での稲作を中心としており、「家族に食べさせたい特別なお米」というのをコンセプトにしている。安全なものを多くの人に届けたいという私の祖父と姿が重なり、改めて農業は重要な産業なのだ実感した。春先のまだ少し肌寒い頃から土を作り、初夏に田植えを終えると一面に生え渡る萌黄色の早苗。酷暑の中での作業、また、それを避けるための早朝の作業時に見た鮮やかな日の出、さらに秋には風にたなびく黄金色の稲穂を目に、一から育てたお米はそれまで食べてきたどのお米とも違う特別なものだった。この感動と美味しさを、より多くの人に届けたい。「作業を重ねながら、その思いは日に日に膨らんでいった。この大変さや想いの集大成である農作物を、どのようにしたら分かってももらえるだろう。」

私は、課題研究という授業で園児を対象とした食育活動をしてはどうかと考え、海老名市の保育園で働いている母に相談してみた。すると、「是非やってほしい!」と園に話を持ちかけてくれ、母の協力のもと、高校の土地を利用してサツマイモを栽培できることになった。今年の五月頃に園児約十名と植え付けを行い、都市化が進む海老名の園児は、農業体験や食に対してどのような興味を持っているのか、食育を通してどのような変化が現れるのか、体験ごとにアンケートをとり、調査している。来る日も来る日も作業中に食べ物の大切さを伝えていくうちに、ある変化を耳にした。なんと、子どもたちが今まで嫌いだった野菜などを食べるようになったそうだ。これには保育園の先生や保護者が強い関心を寄せており、私自身も食育の必要性を感じた。

将来私は、食育体験型農園を設立し、それに加え、安全で美味しさと評判の米作りで生産者と消費者をつなぎ、地域とともに歩む柏山の米農家を目指そうと思う。じいちゃんや菊池さんが教えてくれた「食という生きる力」を、これからも伝えていく人になれるように。